

恐ろしい様であります。

印度土人の家庭生活

Y. I.

近頃ある外國雜誌を見ましたが、こゝにいふ題の咄が載てをりましたので、記載することに致しました、原文は印度土人の演説の筆記で大變に面白く書いて有りますけれど、譯文はとてもそれを寫し出すことが出来ませんで、どうか其意味だけをお取下さらば幸いです。

御承知の通り印度と申す國は大變に廣大な國でございまして氣候も一樣でなく、その住民も澤山な異つた人種から成り、文明の程度に於きましても開化せんとするものもあり、半開なるものもあり、又未開のものもありません、更に其社會組織に至しては、

全く反對で氷炭相容ぬと申すようなものさへありますから、其家庭の狀態を總括して御咄することも容易のことではありません。

されども、此の數多の異りたる人種と宗教のうちに、二つの判然と目立ちて區別せられたる組織がありまして、幾百萬を以て數へらる、印度の人民の過半はこのうちに含まれて居るのでありますが、此二つの社會と申すものは、即ち印度人とモハメット教徒でありまして、其風俗習慣など互に甚しく異つては居ますが、併し其西洋の氣風に反したる點に於ては、二つとも一樣です。

モハメットの命令、その信徒の生活に關しては、世人の熟知する處でありますから、こゝに委しく述べる必要はござりませぬが、一言云て見ますと、此宗派の男女は、印度人よりは遙に、自由を有して居ますので、男

子は一人若くは數人の妻を娶ることも出來、或は結婚しなくて居ても、全く隨意なのです。女子は一般に少年のときに嫁する風ですが、若し不幸にして寡婦となる場合には、再婚したとて決して差し支へはありません。既にモハメットの先妻は、寡婦であつたと申すことです。モハメット教徒社會では、印度人の様に人々を互に離隔して、交際などを許さぬようなる階級的妄説も行はれさせなければ、又生れ落るより死にいたるまで、大事にも、小事にも、其屬してゐる階級の規定に従つて生活し、自分許ではなく、子孫の末までも決して其境涯の外に出づることを許さない様な、強壓的運命もないのです。ですから印度人に比べて見ますとモハメトツ教徒は、よほど自由な人民です。

斯く申しますと、或人は問はれるかも知れませんが、印度の婦人は、常に閨房に閉鎖せられてゐるではない

か、婦人は凡て閉鎖せられてゐるのに、その人民は自由なる人民といはれようか、と併ながら、婦人を閉鎖するのは極めて少數な富豪者のなす一種の贅澤でありまして、モハメット教徒の多數の婦人は、恐らくは訪問者としてさへも未だかつて閨房に入つたとはありませぬ。労働者とか、農夫とか、人足とか、製造所の職工とか、其他百般事業の被雇人等は、どうして其妻女を閉鎖しておくのが出來ませうか、寧ろ此等の妻女は、その良人と同じように朝から晩まで出て忙がしく働らなくなつてはなりませんのです。下等社會の教徒になりますと、今一人の妻を娶ることが都合がよいと思ふ場合には、第二の妻を娶るのです、それは丁度無給の下婢を雇ふやうな者なのです、或大家の園丁が第二の妻を迎へし理由をききますと、其主人が園庭をひろげた、爲めに一人の人足の手間を増したが故だと言

て居ました。實に彼等の妻は、無給の人夫であるので、此下等社會の婦人らが、上流社會の同胞姉妹等の離隔せられて、威嚴のあることを羨むとは、尤で英國の貧婦等が、自分も日々の勞働に氣も身體も倦み疲れてゐる所へ以て、揚々と馬車を馳せて通りすぎる貴婦人等を見て、頻に羨ましがると同様であるのです。又閨房内で成長した婦人達は、其習慣に泥着し、此風俗を廢することを非常なる耻辱として忌み嫌ふのです。稀には大膽な婦人で、今少し自由を得んことを欲するものもありませんが、西洋婦人の如く一般の社會を自由に奔走して暮すようなことは、モハメット教徒婦人の最も反對する處であります。

近頃比較的に教育あるモハメット教徒、ことに外國に旅行した人々は、婦人を閉鎖することが大變に一般家族に害のあることを認めて此制限を弛くしようと云ふ

ことを試むる様になつてきました。上流社會の年若き女子で、教育を受けたもの、社會では、その親戚たる男子の出人を許して居るものもあり、又あるよはは進歩したるモハメット教徒の中には、この風習を全廢することを望むものもありますけれども、かゝる進歩主義の人々は、きはめて少數で、しかもその妻女たるものは、斯る改革に對しては決して賛成しません。これはこの人達は、これによりて益する處のなきのみか反つて其高貴なる位置を顯す區別を失ふといふ損があるからなのです。

印度に屢々起る饑饉の時などでも、政府に於ては救濟の準備も整ひたるに、婦人達は閨房より一步をいで、救を請はんよりは、寧ろ居残りて、徐に餓死する方が勝だなど考へて居ますので、政府に於ては、この憐むべき婦人の所在を調査させて、其報告を待つて

食物を送らなくつてはならないことが、度々あります。

之れによりても、モハメット教徒婦人社会のせればど

因循なるかは知れませう

(つくだ)

(一)

前か け

育 兒 女

子供は活潑に運動するものなり其際には遠慮會釋なく
膝を突き或は土砂中に座し或は轉々することを好む然
るに其衣服は假令粗末にして如何に汚すとも可なる地
質を撰みたるにもせよ日々清潔に保たしめんとするは
容易の業にあらず故に近時流行する處の前かけ様のも
のを相常の粧飾を施して用ゐるなば打見たる處も可愛ら
しく勞を省く上にも經濟上にも大に宜しきものなり今
其形の簡單なるもの一二を擧げん

(イ)及(ロ)は釦を附する所にして(イ)及(ロ)は釦を止

